

ての意義を重視しているようである (pp. 229—30, 232—3, 236—7)。この点、ドップと共通である。さらにミーグは近代理論に対して全然否定的ではない。このことはランゲ批判の箇所をみればあきらかである (p. 228)。しかしこれは近代経済学とマルクス経済学との対決がいかになされるべきか、という根本的問題につながるので、いまここで論じることができない。全體として、ミーグの価値論観は量的側面に重心がおかれていることはあきらかである。(ドップについても、このことが云える。彼の『政治経済学と資本主義』をみれば、あきらかである。) これは彼の批判の相手方である近代経済学者の価値論観がいつのまにか彼に反映したものであろうか、あるいは彼等と共通の思考様式がもともと根底に存するの

であろうか。ミーグ自身、本書中でシュレジンガーの批判の最大の功績は、価値問題の質的局面に特に注意させた点にあるとのべているし (p. 234)、水田氏ののべるところでは、「ミーグは、さいきん、シュレジンガーの『カール・マルクス』から、質的考察について、おしえられたといっている」(『社会思想史の旅』, p. 57) そうである。したがって、ミーグがロビンソン女史の反批判をおこない、マルクス価値論の質的側面について女史が全く無関心である点をあげているが、その反批判は力強いものではない。この質的側面こそ、価値論の論理構造そのものに即しての史的唯物論の具体化が考えられるべき領域であったのである。

(1957. 2. 9. 遊部久藏)

## ミーグ『労働価値論研究』の方法的見地からの検討

### まえおき

編集部からの指示により、ミーグ『労働価値論研究』の第4章マルクスの価値論(I)、第5章マルクス価値論(II)を中心に、彼の労働価値論について、特に労働価値論の方法的見地から検討を加えて見たい。参考までに第4章、第5章の各節の見出しをつぎに掲げる。第4章、第1節リカードからマルクスへの価値論の発展、第2節マルクス経済思想の初期の発展、第3節マルクスの経済学的方法。第5章、第1節『資本論』第1章における価値の概念、第2節概念の精密化と発展、第3節概念の適用、第4節『資本論』第3巻における分析、となっている。第4章の内容を概説すれば、史的唯物論の生成過程を、マルクスの初期の著作、「ヘーゲル法律哲学批判序説」「経済学哲学手稿」「ドイツ、イデオロギー」「哲学の貧困」等々の検討を通じて追究しながら、史的唯物論の完成が労働価値論の出発点であること、『経済学批判』や『資本論』は、假説としての史的唯物論を確證するものだという結論を導き出している。いわば、史的唯物論と価値論との連関を生成史的に追思惟しているという点で、この章はとりわけ興味深い。とくに「経済学、哲学手稿」と史的唯物論との連関の追究は詳細に行われている。第5章では、いわゆる第1巻の価値論と第3巻の生産価格論の関連の問題、すなわち生産価格論は第1巻での分析によって把握された価値法則のモディファイされた貫徹形式であることの論證に力点がおかれ、そしてこの論證が『資本論』の中心課題であるとともに、またその限界を区劃するものだという見解が展開されている。ミーグによれば、「マルクスの研究の主要課題は、資本制的生産

諸関係がひき起す生産価格の価値からの背離の様式——すなわち、資本制生産諸関係が、資本制商品生産独自の供給価格をして、「単純」商品生産独自の供給価格から背離せしめる様式にあった。現実価格が供給価格から背離する原因についての論題はまったく捨象されている。」<sup>1)</sup> この現実価格の供給価格からの背離の問題が、独占資本主義段階での、価値論の主要問題となるのである。ミーグはここに『資本論』の限界とその具体化の緒口を見出そうとするのである。第5章はすべてこの問題意識によって貫かれているが、しかしミーグがこのような問題意識を持つようになったその方法的根拠は、第4章第3節の「マルクスの経済学的方法」にあると思われるので、われわれはこの節の検討を中心にして、彼のマルクス労働価値論の理解の仕方を検討して見たいと考える。

### 1

さてミーグはつぎのようにのべている。「マルクスが『資本論』で行った主な仕事は……生産諸関係の見地から資本制経済形態の起源と発展を説明するということにあった。商品生産一般の場合にも、特殊な資本制商品生産の場合にも、“生産の一定形態が……消費、分配、

1) R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, p. 288. なお, *ibid.*, pp. 154—156 参照。

なお、ミーグは価値が価格に等しいといわれる場合の価格とは、現実の市場価格を指すものではなく、供給価格 (Supply price) を指すものと解さねばならないと考える。供給価格には2つの型があって、1つは単純商品生産のもとのそれ、他は資本制商品生産のもとのそれである。(cf. *ibid.*, p. 199.)

交換の諸形態および、これら種々の諸要素間の相互関係を規定する”ということが証明されねばならなかった。この論證にさいして労働価値論が中心的役割を果たしたことは明らかである。というのは、事實、労働価値論は、生産の社会的關係が交換諸關係を規定するということの、特殊な表現方法だからである。』<sup>2)</sup>

「マルクスの方法によると、研究の出発点はこの全期間にわたって（先資本制諸社會および資本制社會をふくめて——筆者）あてはまる一般的かつ抽象的形態をとった商品生産者としての基本的人間關係の研究でなければならぬ。そしてまず最初にしなければならない仕事は、この基礎的生產關係の性格を分析し、ついでいかにしてそれがすべての商品生産社會における“消費、分配、交換を規定する”かを一般的に示すことであつた。第2の、かつ主要な仕事は——マルクスはそうしているのだが——生産諸關係が他の經濟諸關係を規定する、このような一般的で單純な様式が、商品生産の資本制體制がそれに先行する體制にとって代つた場合に、變貌するその様相を分析することであつた。

うえにのべたような事柄が、マルクスがその經濟學的著作で根本的に試みようとしていることだということが、一たび理解されてしまえば、彼の體系において労働価値論が占める問題は事實上解答されたのも同様である。』<sup>3)</sup>

「したがって、マルクスにとっては、いかに生産諸關係が、消費、分配、交換を規定しているかを證明するという仕事は、本質的には、商品生産の發展に伴って“價値の法則がいかに貫徹するか”を證明する仕事に還元することであつた。』<sup>4)</sup>

ミークがここで理解しているマルクスの労働価値論は明らかに2つの側面をもっている。

1つは労働価値論は、基本的には生産諸關係が他の消費、交換、分配の諸關係を規定するというこの關係を別の表現形式をとって現わしたものだということ、もう1つは、生産諸關係が他の社會諸關係を規定するその仕方は、まず單純商品生産のもとでのそれを、一般的に把握したのち、資本制商品生産のもとでは、この基本的關係がどのように變貌するかを究めなければならない。價値法則の貫徹形式、そのモディフィケーションを、すなわち價値から生産價格への轉形様式を把握するのはこのためである。これによって、生産關係が他の社會關係を規定する、その資本制的様式が究明されることになるのである。

2) Meek, *ibid.*, p. 151.

3) *ibid.*, pp. 152~153.

4) *ibid.*, p. 154.

ミークのこのような労働価値論の理解に仕方について、2つの點から検討が加えられるべきであろう。第1にミークの労働価値論の把握自體が正しいかどうか。第2に、價値の生産價格への轉形が内容的にも、方法的にも正しく把握されているかどうか、ということである。われわれはまず第1の問題から検討して行きたいと思う。

すでにのべたように、ミークによれば、生産諸關係が交換關係を規定する、この様式を別の表現形式をとって表現したものが労働価値論にほかならない。いいかえれば諸商品の交換比率が、商品に對象化された労働量によって決定されるという事實が、これを裏書するという<sup>5)</sup>。はたして労働価値論はこのように理解するべきであろうか。

價値範疇自體が商品生産關係の物的表現形態であり、この商品生産關係自體がすでに生産諸手段の特定の分配關係=所有關係を前提していること、さらにこの生産諸手段の分配形態が、諸生産物の分配と交換の形態を規定するものであることは今日周知の事實である。

したがって、商品生産關係の物的表現形態である價値範疇のうちには、商品生産關係のみならず、その交換諸關係および分配の諸關係がそのうちに萌芽的に含まれている。マルクスが「商品としての生産物という。および資本の生産物としての商品という性格は、すでに流通諸關係全體を、すなわち諸生産物が通過しなければならぬところの一定の社会的過程を包含する<sup>6)</sup>」といい、またエンゲルスが「價値概念は、商品生産の經濟的諸條件の、もっとも一般的な、したがって、もっとも包括的な表現である。それゆえ價値概念のうちには、ただたんに貨幣の萌芽ばかりでなく、商品生産と商品交換とのさらに一そう發展した、いっさいの形態の萌芽もまた含まれている。特殊な商品である労働力が市場に現われると、その價値は他の商品價値と同様に、その生産のために社会的に必要な労働時間によって決定される。それゆえに諸生産物の價値形態のうちには、すでに萌芽として資本制生産形態全體が、資本家と賃労働との對立が、産業豫備軍が、恐慌が潜んでいるのである<sup>7)</sup>」と指摘しているのは、うえにのべた理由に基づくものであつた。このような内容を含むものとして、價値範疇は商品生産諸關係の物的表現形態だと一般的に表現することができるであろう。價値範疇は何よりもまず一定の人間關係の、歴史的に特殊な表現形式なのである。

ミークが労働価値論は、生産關係が交換關係を基本的

5) cf. *ibid.*, pp. 155~156.

6) 『資本論』日評版譯⑪ 520 ページ。

7) 『反デューリング論』新潮版選集 52~53 ページ。



に規定する様式の別の表現形態だと指摘する場合に、生産関係が交換関係を根本的に規定するという、その点にのみ力点がおかれ、価値範疇がさきにのべたような包括的な意味で商品生産諸関係の物的表現形式だという点が軽視されているように思われる。この点は第5章で彼が展開している『資本論』における価値規定の把握の仕方のうちに現われている。ミーグのこの章での主要關心は価値の量的規定にある。すなわち、第1節における価値の量的規定、第2節における複雑労働の単純労働への還元の問題、第3節での「価値どおり」での販賣、すなわち需給の變動の捨象の意義にかんする叙述、第4節での、生産価格論、価値の生産価格への轉形問題への論及等々がそれである。いいかえれば、生産物の価値形態、すなわち商品に含まれている、資本制生産の基本的矛盾の端初形態には全然ふれられていない。第5章第1節では価値の量的規定に関連して労働の二重性の規定にはふれられてはいるが、それは資本制生産の基本的矛盾の端初形態として把握されていないのである。

さきにものべたように、価値範疇自体が、また商品自体が、流通諸関係を包含しており、この流通諸関係が基本的に生産関係によって規定されていることは事実であるにしても、価値範疇はただこの規定関係のみを表現するものではないであろう。ミーグの労働価値論の把握の仕方では、価値範疇に含まれている包括的な人間関係の對象化（その人間関係が含む對立矛盾をも含めて）が、きわめて一面的にしか把握されていないように思われる。

もっとも『労働価値論研究』の全巻を通じて、ミーグは、価値論の俗流化、とくにバレット以後の經濟現象をたんなる數量關係に解消してしまう、生産關係を無視した、いわば内容なき經濟學にたいして理論的に闘っているのだから、ミーグの論證の力点が基本的なのは生産關係であって、交換關係はそれによって規定されるにすぎないという点に置かれるのは當然すぎるというのではあるが、労働価値論の意義をこの点にのみ解消してしまうことには、われわれはどうしても納得し難いのである。

## 2

われわれはつぎに第2の問題點に移ろう。ミーグによれば、価値から生産價格への轉形問題を論ずることは、すなわち価値法則のモディフィケーションの問題をとり扱かうことは、商品生産が資本制商品生産へ發展した場合でも、依然として生産關係が交換關係を規定していることを論證するためであるという。価値の生産價格への轉形の論證をたんにこの側面にのみ絞ってよいかどうか、

という點が第1に問題となるばかりでなく、ミーグの單純商品生産そのものの抽象の仕方がすでに問題を含んでいる。われわれはまずこの後の點から論じてゆきたい。ミーグはまず生産關係が交換關係を規定する、その規定の關係をもっとも一般的に把握するために、單純商品生産を抽象する。單純商品生産社會においては、諸商品の交換比率は直接的に對象化された労働比率に比例している。したがって、この社會では、生産による交換の規定がもっとも純粹に現われるとミーグは考えるのである<sup>8)</sup>。

ところで、ミーグはこの單純商品生産の抽象をつぎのように行う。單純商品生産は歴史のうえでは、資本制社會においてのみ全面的に展開するのだが、それは奴隸制の社會にも封建制の社會にも存在した。したがって、マルクスの出発點は、これらの全社會に多かれ少なかれ含まれている單純商品生産であったとミーグは考える<sup>9)</sup>。この點がすでに問題であり、価値法則のモディフィケーションの問題をさきにのべたような觀點からのみとり上げる彼の見解も1つはここに由來する。われわれはミーグとは異ってつぎのように考える。『資本論』の出発點となった商品はあくまでも、資本制商品生産社會から抽象された商品であって、それは歴史上に現われる單純商品と同一ではない。周知のとおり、單純商品は交換に出されて始めて商品となるのであり、その交換形式は $x$ 量使用對象 $A=y$ 量の使用對象 $B$ であるのに反し、資本制社會では、生産物は始めから交換を豫想して、交換のために生産せられる。その交換形式は $x$ 量商品 $A=y$ 量商品 $B$ である。しかし、資本制社會のもっとも單純な生産關係として抽象された商品は、うえにのべた意味で歴史上に現われた單純商品と決して同一ではないけれども、いわば、エンゲルスがのべている「完全に成熟した、典型的な發展點において觀察」された單純商品生産である。この意味で歴史上に現われた單純商品生産と資本制社會からそのもっとも抽象的な生産關係として論理的に抽象された單純商品生産とは照應關係にあるのである。

『資本論』冒頭の商品はこのような論理的に抽象化された商品であって、決して歴史上の單純商品と同一ではない。『資本論』冒頭の商品がこのような意味での商品であればこそ、それはいわば「復元力をもつ抽象」として、そのうちに含んでいる抽象的諸規定（たとえば恐慌の可能性、信用發生の自然的基礎）を具體的に、資本制社會のもとで展開することができるのである。さらにいいかえれば抽象的なものから複雑なものへ上向する『資本論』の論理的方法は、あくまでも資本制社會を論理的に

8) cf. Meek, op. cit., p. 155.

9) *ibid.*, pp. 152—153.



再構成する方法であって、この論理的方法がただ歴史的  
形式をとるにすぎないのである。エンゲルスの言葉を借  
りれば論理的方法は「歴史的形態と攪亂する偶然性とを  
とりさった歴史的な取扱い方」なのである。だからこの  
論理的方法がとる歴史的方法に幻惑されて、論理的に單  
純な範疇と歴史上に現われる單純なものと同視しては  
ならない。ところでミークの單純商品の抽象の仕方は明  
らかに兩者の混同のもとで行われている。彼は先資本制  
社會に存在する商品生産と、資本制商品生産とを共通な  
ものとして、あるいはこれらの共通な基礎規定として、  
單純商品生産を抽象しているからである。このような抽  
象自體に問題が含まれている。なぜなら、これによって、  
論理的に抽象された商品と歴史上の單純商品とが同一規  
される結果、論理的に抽象された商品、したがってまた  
價值範疇が、端初的に含んでいる資本制社會の諸矛盾の  
展開の意義が稀薄化されるからである。論理的に抽象化  
された商品、いわば「完全に成熟した、典型的な發展點  
において觀察」された商品から出發、上向してこそ、さ  
きのエンゲルスの價值概念にかんする引用が示すように、  
抽象的ではあるが包括的であるその矛盾を具體的に復元  
して行くことができるのである。ミークのうえにのべた  
ような單純商品の抽象の仕方は根本的には彼の勞働價值  
論の把握の仕方自體のうちにあるものようである。生  
産關係が交換關係を規定する様式の別の表現形式が勞働  
價值論だというこの把握の仕方、極言すれば勞働價值論  
の價格側面のみの方説、だから生産關係が交換關係を規  
定するといっても、たんに生産が交換を規定するといっ  
てもいいくらいの、本來的な意味で生産關係ではない生  
産の重視、このような形式的な理解の仕方のうちに彼の  
歴史上の單純商品生産と論理上のそれとを同一視する抽  
象の仕方が潜在しているように思われるのである。

つぎに、ミークのいう、價值法則のモディフィケーシ  
ョンの追究は生産關係が交換關係を規定する資本制様式  
の研究だという考え方を検討して見よう。

一體マルクスが單純商品（論理的に）の價值分析から  
出發して生産價格、または三位一體的範式と呼ばれて  
いる。資本—利潤（または利子）、土地—地代、勞働—勞  
賃、さらにいいかえれば「諸資本の…競争中に現われ  
る…または生産代理者たち自身の普通の意識中に現われ  
るときの形態」<sup>10)</sup>へ上向してゆく分析の意義はどこにあ  
るか。ミークもこのように、形式的には「いかに  
して價值法則が貫かれるかを展開すること、これこそが  
科學です。だから外觀上法則に矛盾するあらゆる現象を

初めから『説明』しようとするれば、科學以前に科學をあ  
たえねばならないことになるでしょう」<sup>11)</sup>というマルク  
スの方法の適用ではあるが、その内容のもつ意義は、物  
に對象化されてのみ現象する（したがって眞の人間關係、  
階級關係を陰蔽する）人間關係、階級關係の基礎分析を、  
いわゆる、商品、貨幣、資本にまといつく物神性の本質  
をえぐりながら行うという點に1つの意義がある。いい  
かえれば人間が生産にさいしてとり結ぶ階級關係の分析、  
したがって眞の生産關係の分析を、これを蔽おいかくす  
諸現象形態と統一的に把握するというのがその意義であ  
る。（生産關係が諸他の社會關係を規定するという意味  
も、このようなものとして理解されねばならない）もう  
一つの意義は、さきにも一寸ふれておいたように、商品  
に含まれている資本制社會の端初的矛盾をその資本制的  
形態の矛盾まで追思惟するということである。『資本論』  
の主目的は、いうまでもなく資本制社會の經濟的運動法  
則の把握にあるが、このようにして分析された矛盾こそ  
資本制社會の運動法則なのである。だから『資本論』に  
おいてマルクスは、商品に内在する價值と使用價值の直  
接的矛盾と、この根源をなす勞働の二重性の矛盾を究わ  
めたのち、この矛盾の外的運動形態たる商品と貨幣との  
對立矛盾、さらにこの商品と貨幣との對立矛盾を土臺に  
して、勞働力の商品化という新しい階級關係の發生、商  
品生産の質的發展を前提とする資本の運動形態を分析す  
る。資本のもつ矛盾は生産過程においては、資本蓄積と  
勞働者の慢性的窮乏化の矛盾として、資本の流過程に  
おいては價值増殖過程たる生産過程と、その消極的制限  
過程たる流過程との對立矛盾としてとらえられたのち、  
社會的總資本の再生産と流通の考察において、「種々の部  
門における生産の不均衡」と「あたかも社會の絶對的消  
費能力だけが限界をなすかのように生産諸力を發展させ  
ようとする資本制生産の衝動に比較對照しての、大衆の  
窮乏と消費制限」としていっそう具體的に把握され、さ  
らに生産價格を論じている第3卷では、利潤率の傾向的  
低落の法則のところで、この矛盾は、剰余價值の收取の  
條件とその實現の條件との間の矛盾として、過剰資本と  
過剰人口の發生として、したがって「資本制生産の眞の  
制限は資本そのものである」<sup>12)</sup>として分析されているの  
である。商品の直接的矛盾はこのように利潤率低下の法  
則のもつ矛盾として一そう具體的に把握され、したがっ  
てまた資本の運動法則がその矛盾形態において把握され  
ているのである。價值法則のモディフィケーションはた

11) 『資本論』に關する手紙、岡崎譯、上卷 223 ページ。

12) 『資本論』日評版譯、⑨ 212 ページ。

10) 『資本論』日評版譯⑧ 102 ページ。



んに形式的に価値法則の貫徹形式を分析するだけではなく、このような内容をもつものとして同時に理解しなくてはならないだろう。ミーグが、マルクスの主要な仕事は「生産諸関係が他の経済諸関係を規定する、このような一般的で単純な様式（単純商品生産のもとでの一筆者）が、商品生産の資本制体制がそれに先行する体制にとって代った場合に、變貌するその様相を分析することであった」<sup>13)</sup>とのべる場合には、われわれがうえにのべた点をも考慮する必要はなかったらうか。

このことはミーグによる価値法則のモディフィケーションの解釋の仕方が、じつは労働価値論の独占資本主義段階への適用と関連していることから、とくに重要である。ミーグによればマルクスは『資本論』第1巻において、価値と供給価格との直接的一致を、第3巻においては資本制段階における価値と供給価格（生産価格）との間接的一致を問題にしているけれども現実の市場価格の供給価格からの背離を問題にしていない。この背離の問題が独占資本主義段階での労働価値論の適用問題なのだという。ミーグによればこの背離はマルクスが『資本論』で展開している、総価値＝総価格、総剰余価値＝総利潤という枠のなかでは説明し難い。独占利潤には剰余価値以外の“profit upon alienation”とでもいわるべきものが含まれている。そしてこの独占段階における現実の市場価格の供給価格からの背離の程度を説明するものは、資本制生産の各段階に共通な商品生産ではなく、これに組合わされる、独占段階特有の、生産における従属または協働関係なのである<sup>14)</sup>。現実の市場価格の供給価格からの背離、すなわち独占価格は、マルクスも示唆をあたえている<sup>15)</sup>総価値＝総価格の枠のなかで説明できない。マルクスが、独占価格が成立した場合でも、総価値＝総価格の前提条件は崩れない、といているのは、マルクスの段階では独占がきわめて部分的な現象にすぎなかったからであって、今日のように独占が廣汎に支配している段階には妥當しないとミーグはのべている。

ミーグのこの見解は端的にいえば、いわゆる理論と段階論との関係に匹敵するものと思われる。ミーグはのべている。「マルクスが考察したのよりも、もっと廣い範圍の歴史的狀勢にわたって、価値法則が作用する様式を検討し比較し始めるなら、われわれの研究方法はマルクスのそれとは、ある程度異ってこなければならぬということが明らかになる。」<sup>16)</sup>そしてこの方法とは、独占段階

特有の生産関係における従属または協働関係を含めた、いわば複合的な生産関係による市場価格の供給価格からの恒久的な背離、すなわち、以前なら「非正常的」「經濟外的」なものと考えられたものによる背離の説明なのである。独占価格はもはや生産価格のように、価値法則の「轉形」（総価値＝総価格）なのではない。競争資本主義段階の方法である『資本論』の方法は、この背離を分析する出發点であるにしても、分析そのものには役立ちえない、とミーグはいうのである。

独占利潤は Profit upon alienation というミーグの考え方はここから出てくる。これについてわれわれは2つの異論をもつ。第一に独占資本主義段階における価値法則貫徹の完全な否定にたいしてである。このことは、周知のことだが、労働のみが価値を創造するという価値論の基本規定を否定することになる。第二に、独占資本主義段階は、いわゆる段階論としてしか解明できないのか、という点である。価値法則は歴史的には単純商品生産に照應する法則ではあるが、基本的には資本制社會においてのみ十全的に把握できる資本の内的法則である。そのかぎりでは、「独占によって、商品の生産価格をこえ価値をこえて騰貴する独占価格が可能となるにしても、そのことによって、商品の価値によってあたえられる限界は止揚されないであろう」<sup>17)</sup>というマルクスの規定はミーグのこれにたいする批判にもかゝらず<sup>18)</sup>妥當するのではないか。

独占価格もまた生産価格とは異った型の、価値法則のモディフィケーションと考えるべきではないか。しかしその規定はわれわれに残された大きな課題であることはいうまでもない。

## む す び

われわれはミーグの労働価値論の理解の仕方、これに伴う価値法則のモディフィケーションの理解の仕方を中心に論評を加えてきた。

しかし、ミーグの労働価値論が持つうえにのべたような難点にもかかわらず、第4章および第5章で展開されているマルクス労働価値論の解釋にはきめて暗示に富むところが多いこともつけ加えておこう。とりわけ第4章における「經濟學哲學手稿」の解釋、第5章における資本の蓄積過程が「労働力」の価値規定にあたる影響の敘述、マルクスにおける算術的例證の意義についての敘述はきわめて興味深い。

(宮本義男)

13) Meek, op. cit., pp. 152—153.

14) cf. Meek, op. cit., p. 289.

15) 『資本論』日評版譯① 484 ページ参照。

16) Meek, op. cit., p. 288.

17) 『資本論』日評版譯① 484 ページ。

18) Meek, op. cit., p. 286.